

Q3. インフラ整備の他にはどんな協力があるの？

A3.

日本は同地域の人材育成にも注力しています。JICAはこれまでに約2,600人の専門家を同地域に派遣するとともに、1万人を超える研修員を日本に受け入れ、さまざまな分野の能力向上を支えています。

ウズベキスタン、キルギス、タジキスタンとの間では、若手行政官を日本の大学院に受け入れる留学事業も実施中です。これまでに約500人が日本で学んでおり、キルギスの留学経験者から法務大臣を輩出したといううれしいニュースも届いています。

国の基盤を支える行政官の育成が重要な一方で、今後は産業の発展を見据えた“産業人材”のニーズが一層高まります。これを踏まえて、安倍首相は

2015年に中央アジア5カ国に対する高度産業人材の育成支援を表明。日本の高等専門学校で採用されている日本型工学教育を普及する協力が進んでおり、職業専門的な知識を持った人材を育てる仕組みを学ぶため、中央アジア諸国の大学教授や行政官が日本の工学教育の現場を視察に訪れています。

この他にも、JICAを通じて設置された「日本人材開発センター」でのビジネス人材育成や、財務省総合政策研究所による金融・財政分野の人材育成を目指すセミナーなども行われています。複数の国の人材を同時に日本に受け入れる研修では、研修員同士のネットワークも生まれているようです。

Q1. 中央アジア・コーカサス地域って？

A1.

中央アジア・コーカサス地域とは、カザフスタン、ウズベキスタン、キルギス、トルクメニスタン、タジキスタンの中央アジア5カ国と、アゼルバイジャン、アルメニア、ジョージアのコーカサス地方3カ国をあわせた8カ国を指します。アジアとヨーロッパの結節点として、地政学的に重要な地域です。

この地域の特徴は、石油や天然ガス、レアメタル（希少金属）などのエネルギー・鉱物資源が豊富に採れること。そのため、同地域の安定と発展は日本にとっても重要です。2015年10月には、安倍晋三内閣総理大臣が日本の首相として初めて中央アジア5カ国全てを訪問していますが、その背景には

資源確保だけではない、歴史的つながりがあります。

日本は、中央アジア・コーカサス諸国が1991年に旧ソ連から独立して以来、同地域の経済的自立を支援するために、インフラ整備や人材育成など、さまざまな協力を行ってきました。中国とロシアという二つの大国の間で独自の立ち位置を確立しようとするこの地域の国づくりを、日本は支援してきたのです。

地域全体としてこうした特徴がある一方、国の文化や経済状況はそれぞれで異なり、多様性にあふれています。日本は国ごとのニーズに応える支援を展開しています。

Message from Azerbaijan

アゼルバイジャンの持続的な経済成長とODA

アゼルバイジャンは、独立直後の混乱やナゴルノ・カラバフ紛争などにより困難な経済社会情勢を抱えてきましたが、近年は、カスピ海沖の石油や天然ガスの油田など、豊富なエネルギー資源を活用して飛躍的に発展しています。



2015年度に草の根無償資金協力によって整備された給水施設

しかし、経済は石油・天然ガス

の状況に影響を受けやすく、原油価格の下落により打撃を受けています。また、ソ連時代に整備されたインフラ施設の老朽化も進んでいます。首都では近代的なビルやインフラの整備が進んでいる一方、地方部では住民の生活基盤となる上下水道などの社会インフラの整備が十分ではなく、地域格差が広がっています。

こうした課題を克服するために、アゼルバイジャン政府は石油依存からの脱却をスローガンとして掲げ、農業や観光業の発展、物流のハブ化を推進。日本はODAにより、インフラ整備や地域住民の生活基盤の向上を対象とした支援を進めています。電力分野では、円借款により建設されたセヴェルヤナ発電所が、この国一番の発電効率で国中に電力を供給しており、地方でも高い普及率を保っています。上下水道分野では、インフラが不足している地方都市に対して円借款による支援を実施中です。

円借款の他にも、政府レベルの開発の手が届きにくい村落では、草の根・人間の安全保障無償資金協力を活用して井戸や給水管の整備を進めています。今後も、日本は円借款、無償資金協力、技術協力というODAの3つの手法を的確に組み合わせた効果的な支援を続けていきます。

Q2. 日本はどんな支援をしているの？

A2.

現在、中央アジア・コーカサス諸国で使われているインフラの多くは、ソ連時代につくられたものです。鉄道や道路などの運輸インフラ、発電所などのエネルギーインフラも、建設から50年以上経つものが多く、老朽化が問題となっています。

日本は、ウズベキスタンやアゼルバイジャンでガス火力発電所の近代化事業を支援しています。ウズベキスタンでは、ODAなどにより日本企業のタービンが導入されており、その優れた性能や手厚いアフターサービスが高い評価を受けています。

一方、道路については山岳地が多いキルギスやタジキスタンなどでの協力が中心です。例えば、一昨年協力が合意されたキルギスの国際幹線道路の一部を

改修する事業では、日本は優れた防災技術を生かして、トンネル建設や落石対策、地滑り対策などを実施することになっています。この他にも、空港の整備や橋の架け替え計画など、複数の国でさまざまなインフラ整備に協力しています。

また、歴史を振り返れば、第二次世界大戦で旧ソ連の捕虜となった日本兵がウズベキスタンの首都タシケントにあるオペラハウス「アリシェル・ナボイ劇場」の建設にあたったという逸話もあります。日本人の働きぶりが地元の人々に感銘を与えただけでなく、完成した劇場は大地震に襲われても壊れることなく、避難所として人々を守ったそうです。現在の協力も、こうして育まれてきた信頼関係の上に成り立っているのです。

キルギス幹線道路沿いのクガルト橋の架け替えを支援し、地域経済の活性化に貢献



日本とゆかりの深いウズベキスタンのアリシェル・ナボイ劇場。照明・音響機材整備に協力した

POINT

1 日本の協力が、旧ソ連から独立した中央アジア・コーカサス諸国の国づくりに貢献

2 インフラ整備の需要が高く、日本の技術が生かされている

3 日本は留学事業や研修などを通じて行政官や産業人材の育成を支えている

テーマ 中央アジア・コーカサス地域

外務省 国際協力局
国別開発協力第二課長

田中 秀治

Hideharu TANAKA

1991年、当時の大蔵省入省。98年から約3年間、在インド日本国大使館で経済協力に携わる。内閣法制局参事官、財務省関税局参事官（国際協力担当）などを経て、2015年7月より現職。

「ここが知りたい」。国際協力に関する政策を外務省の担当者が分かりやすく解説します！

